

恵みに生きて

暮らしと生物多様性

現代の山守集団

三重県北勢地方で活動中

NPO「森林の風」

静かなヒノキ林に、チェンソーのうる音響き渡る。「ドーン」。樹齢40年ほどの木がゆっくりと倒れていった。

三重県亀山市内の小さな山林。今月中旬、森林の伐採作業などを請け負うNPO法人「森林(もり)の風」(蒲田

博会長、会員約20人のメン

てきたね」

バーは間伐や枝打ち、目的に

瀧口さんらが、グループを

応じて木を切り分ける「玉切

発足させたのは5年余り前。

り、木の搬出などの作業に

フィールドとする養老・鈴鹿

汗を流した。手入れを始めて

山脈が連なる同県北勢地方の

1年弱。林内に差し込む陽光

人工林は植林後にほったらか

を見つめながら、事務局長の

の所も多かった。荒れた森

瀧口邦夫さん(60)はつぶやい

は保水力が落ち、災害にも弱

た。「だいぶ、いい森になっ

い。「健康な水源の森に生き

間伐技術はセミプロ 人工林再生に燃える

光差し鳥が飛ぶ 100年先見て植える広葉樹



伐採作業を繰り返すことで、森に光が入り、生命が再生される

返らせたい」。そんな思いが活動の原点だった。

ただ、道のりは平坦ではなかった。「最初のころ、山

主から『おまえらに本当にやれるんか』とよく言われまし

た」。人工林の管理は木の成

長を考慮し、密度をきちんと

計算した上で計画的に間伐し

ていかなければいけない。と

てもボランティア気分では

るほど旨くないのだ。このた

め、セミプロの集団を目指し、

チェンソーなどの技能アッ

プに加え、森林調査の手法や

測量の技術なども身に着け

た。「少しずつ実績を重ねる

うちに人脈もでき、活動場所

が増えていきました」。これ

まで手掛けた山林は計約24診

に及ぶ。

山が健康を取り戻しつつあ

ると感じるバロメーターが、

生物の多様性だ。「間伐した

後の森に入ると、まず鳥が増

えている。木が密集している

と飛べませんから。光が入っ

て明るくなった森ではリスも

見かけます。針葉樹の森に落

葉樹も生えてきますし、やれ

ばやるだけの効果はあると思

います」。瀧口さんは手応え

を感じている。

一方、荒れた森で崩れた斜

面を見る度に、土壌の大切さ

を痛感する。一つの工夫とし

て、木を伐ったままの状態に

放置するのではなく、ちゃんと横に寝かせて積みようにして

いる。土壌と種子の流出を防ぐとともに落ち葉を堆積させて有機質の土壌をつくるためだ。針葉樹に広葉樹を交えた混交林の育成も目指す。多種多様な木が生えれば根が絡み合い、土壌は強くなる。今、企業と連携して広葉樹の苗木を土ポットで育てており、これから順次、山へ植え替えていく予定だ。

現役のサラリーマン、リタイア組、自営業者、主婦など顔ぶれはさまざまだが、森林再生にかける思いはそれぞれ熱い。「50年、100年先に豊かな森林を残したい」。メンバーはそんな未来を夢見ながら、今日も森に入る。

ペン・松本宣良
写真・兵藤公治